

九州大学歯学部小児歯科における知的障害児の歯科診療の実態報告

○宮崎葉子, 河野恭子, 柳田憲一, 中田 稔
(九大・歯・小児歯)

小児歯科診療において、心身障害児の継続的な口腔衛生管理は重要である。しかし、心身障害児は身体的、精神的に障害を有するため、歯科診療に対する十分な協力と理解が得にくい。そのため歯科診療、口腔衛生管理を行うにあたっては各患児の身体的、精神的状態を見極め、最も適切と思われる対応の仕方が必要となる。

そこで我々は各々の知的障害に対する適切な治療手段を検討するため、知的障害児を対象に過去のカルテをもとに調査を行ったので報告する。

九州大学小児歯科開設より1998年3月31日までに当科を受診した心身障害児のうち精神発達遅滞、自閉症、ダウン症、水頭症等の知的な障害を持つ患児は327名を占める。そのうち精神発達遅滞児は221名、初診時平均年齢は7.7歳、初診時未処置歯(以下未処置歯と略す)は4.9本、全身麻酔下歯科治療経験者(以下全麻経験者と略す)は29.0%であった。自閉症児は35名、初診時平均年齢は9.0歳、未処置歯は5.9本、全麻経験者は45.7%であった。ダウン症児は51名、初診時平均年齢は5.5歳、未処置歯は3.3本、全麻経験者は13.7%であった。水頭症児は20名、初診時平均年齢は6.8歳、未処置歯は5.3本、全麻経験者は15.0%であった。

このように、知的障害児の中でも自閉症児は初診時年齢が高く、未処置歯が多く、全麻経験者が多い。これに対してダウン症児は初診時年齢が低く、未処置歯が少なく、全麻経験者が少ないといえる。

障害の種類や程度により対応の仕方も様々であり、各患児への身体的リスクが最も少ない方法で、かつその後の歯科診療への精神的ダメージを与えない適切な対応法が選択されるべきである。

乳歯う蝕の発生要因に関する研究

○吉良直子, 平松智子, 長光美保
(熊本市西保健所)

【目的】乳歯う蝕の発生と母親の口腔状況や生活環境との関連を検討し、今後の施策や指導のための資料とすることを目的とした。

【対象と方法】昨年度の3歳児歯科健診受診者1,103名のうち242名を対象とした。母子管理票を利用し、妊娠時の母親の口腔状況や幼児の生活環境&習慣と乳歯う蝕の発生状況について分析検討を行った。

分析にはSPSSを使用した。

【結果】当所の3歳児の有病率は34.4%、1人平均う蝕本数は1.63本である。標本は32.3%、1.42本、母親の未処置歯数と就寝時間、複合家族、歯肉炎、間食回数等に正の相関が認められた。

(Pearsonの相関)

環境と生活習慣では、両親の年齢と子どもの起床時間、在胎週数と出生体重、幼児期の身長体重、1.5歳児の指しゃぶりと哺乳瓶の継続、複合家族と間食回数、就寝時間等に正の相関が認められた。

また、妊婦歯科健診受診者群は未受診者群よりも有意にう蝕が少なかった($p < 0.01$)う蝕群は、10時以降の就寝が多く、1.5歳児健診時に母乳や哺乳瓶の継続が見られた群は有意に3歳時でもう蝕が多くなっている。

【考察とまとめ】生活習慣や環境が乳歯う蝕の発生に関与していることが確認された。

保健所における歯科保健の現状分析は、事業の効率的な運営と評価に重要である。今回の調査で、う蝕の発生の予測と、個人に適した支援の可能性が示唆された。